

論文

花月園競輪等に関する新聞報道と 「レジャーの空間」の変容

——1985～2009年における全国紙掲載記事の分析——

杉山 和明

I はじめに

本稿が取り上げる花月園競輪とは、神奈川県競輪組合が実施していた公営競技を指し、その主たる開催地が、花月園観光株式会社の運営する花月園競輪場であった。⁽¹⁾この競輪場は、戦災復興の財源を得るため1950年5月に鶴見花月園跡地に開設されて以降約60年間に亘って営業し、2010年3月31日をもって事業廃止となった。その後、競輪場跡地は、神奈川県などが主催する検討委員会の審議を経て、2015年11月現在は、独立行政法人都市再生機構（UR）主導のもと、防災公園街区整備事業として隣接する民間企業社宅跡地とともに一体的に開発されることが決定しており、競輪場跡地の大半が地区公園〔(仮称)鶴見花月園公園〕として再生する予定となっている。⁽²⁾

花月園競輪場が立地していた空間は、かつて東洋一といわれた鶴見花月園の跡地であったことから、これまで郷土史、都市史、大衆娯楽史、音楽史、建築、都市計画などといった様々な分野で言及されてきたが、作家

たちが対象とする場合、戦前の状況に関心が寄せられる傾向にあったといえる。

鶴見花月園を中心的に取り上げた著作としてまず初めに挙げたいのが齋藤（2007）である。この研究は、郷土史の観点から、創設者平岡宏高の生涯を明らかにすることを通じて鶴見花月園の全体像に迫ることを目指し、設置の経緯から最盛期の活況までを多数の図版を用いながら描き出した重要な文献といえる。⁽³⁾

鶴見花月園について部分的に紹介したものでは、建築・都市計画の立場から、橋爪（2000）が、日本初の大規模遊園地として鶴見花月園を描き、安野・篠野（1998, 1999）は、明治から昭和初期の東京近郊における遊園地を多角的に分析するなかで、大規模な改変が行われることで開園当時から変貌した遊園地の例として鶴見花月園に言及している。

特に花月園内に設けられた舞踏場に関しては、日本におけるダンスホールの誕生から発展そして取締りの歴史を紹介した永井（1991）が、1920（大正9）年開場の鶴見花月園舞踏場を日本初の営業ダンスホールとして描いており、音楽史では、武石（2006）が、「ハタノ・オーケストラとそのメンバーが日本のオーケストラ運動の揺籃期に果たした役割」を明らかにするなかで、鶴見花月園舞踏場が彼らの活動場所の一つであったことを各種の資料から記している。また、鶴見花月園を直接論じるものではないものの、平岡宏高の経営手法に着目した小川（2011）は、鶴見花月園の前身ともいえる大型洋風割烹向島の花月華壇の開設から閉園までの過程を記述している。

他方、花月園競輪の歩みについてしてみると、歴史や文化の側面に特化して記述しようとする学術研究は少ない。たとえば、建築・都市計画の観点から、京浜臨海部における工業都市空間と「レクリエーション空間」の関係性を歴史的な変遷から読み解いている野原（2010）は参照に値する研

究といえるのだが、この研究では、花月園競輪の営業期間と重なる1950年代から2009年のあいだの鶴見区の「レジャー空間」を対象の一つとしているものの、企業による福利厚生施設としての「レクリエーション空間」の変遷過程の解明を主題にしているためか、競輪場という空間にはまったく言及して⁽⁴⁾いない。

もちろん、花月園競輪の運営を実質的に担ってきた花月園観光株式会社による社史（花月園観光株式会社編 1975, 1980）や鶴見花月園の時代から経営にも関わった沿線私鉄会社社史（京浜急行電鉄株式会社編 1998, 1999, 2008）が存在し、古川（1997）、石川（2010）、J K A 編（2009）、立岡（2000）のように全国の競輪事業の動向のなかで触れている文献もあるが、花月園競輪に絞って60年という年月を通時的かつ社会文化的視点から検討した文献は管見の限り見当たらない。花月園競輪場という空間についても、往時の鶴見花月園という場所に魅力を感じる者が多かったことや、花月園前駅に隣接しているというアクセスの良さもあり、映画やドラマのロケ⁽⁵⁾地として使用されてきたので、個々に記述されてきたことは確かであるが、新たな観光地として競輪場跡地が聖地化の対象とされるまでには至ってはいない。⁽⁶⁾

そこで本稿では、花月園競輪60年の歴史のなかでも、1980年代に隆盛を極めてから次第に経営が危ぶまれていき、事業の廃止と跡地利用をめぐる議論が交わされる直前までの過程を解明することを目指したい。花月園競輪等を報道する全国紙掲載記事のなかにもみられる事物、出来事、空間に関わる表象の変遷、とりわけ、花月園競輪という公営競技が創り出す空間の意味の変容に着目する。

こうした公営競技場が創出する空間に関して、地理学内ではいくつかの研究がなされている。競輪場を「遊興空間」ととらえて考察した前出の立岡（2000）は、戦後の競輪事業組織を競輪場の立地分布と設置数の推移

から分析している。同じく公営競技である競艇については、寄藤（2005, 2006）が、常滑競艇場を事例として、公営ギャンブルが地域社会と来街者を取り込みながら創出する空間を「ギャンブル空間」と定義し、詳細なフィールドワークからギャンブル空間の形成過程を明らかにしており、そうした空間を寄藤（2009）では「レジャーの空間」の一種ととらえて研究方法を概説している。二つの研究で用いられる「遊興空間」と「ギャンブル空間」では意味内容の範囲が大きく異なるものの、いずれも「レジャーの空間」を対象とした研究と位置づけられる。「レジャーの空間」は、神田編（2009）が多岐に亘る事例から示しているように、さまざまな形態の空間として展開する現代レジャー全般を包括的に取り込む概念である。

本稿では、この枠組みを参照しつつも、花月園競輪が関係する空間の領域を、競輪場というレジャー施設自体に限定することなく、花月園競輪場を運営する花月園観光が携わる場外車券場や、花月園競輪場付近の花月園前駅および花月園前踏切などといった、花月園競輪が関わる競輪場以外の他所の空間をも含む拡張した領域として捉え議論する。なぜなら、花月園競輪場という物的な空間を超えて花月園競輪の表象は展開しており、翻ってそれらの総体が花月園競輪場という空間の意味にも反映されると考えられるからである。

すなわち、本稿の目的は、新聞報道と事物、物事、空間に関わる表象の関係性に着目し、花月園競輪場とその周辺の空間、ならびに競輪場運営を担った花月園観光の動向に関わる全国紙掲載記事から、花月園競輪に関わる「レジャーの空間」の意味の変容を描き出すことにある。

跡地再生に向けた大規模開発が進行するなか、かつての空間が著しく改変される前に、花月園競輪が関わる事象をめぐってどのような出来事が繰り広げられいかなる意味が付与されていったのか、その変遷を辿ることは社会・文化地理学的な観点からも意義が認められよう。

II 研究方法と主な対象の概況

1. 研究方法と新聞記事の選定

全国紙に掲載された花月園競輪に関連する新聞記事の概数を調べるためにG-Searchデータベースサービス <http://db.g-search.or.jp/>を用いて検索を行った。本稿では、日本経済新聞を除いた、朝日新聞（朝日）、読売新聞（読売）、毎日新聞（毎日）、産経新聞（産経）を対象とした。全文検索が可能な各紙の収録期間の始まりは、朝日が1984年8月4日、読売が1986年9月1日、毎日が1987年1月1日、産経が1992年9月6日であるため、本稿ではこれらの期間の記事を対象とした⁽⁷⁾。

2015年11月9日現在、全国紙を対象としてキーワード「花月園」で全期間の検索を行うと、朝日115件、読売101件、毎日223件、産経192件が得られる。この中から、花月園競輪とは直接的な関わりを持たない記事を除去⁽⁸⁾し、1984年8月4日以降はじめて花月園関連の記事が出現した1985年5月から、花月園競輪の経営見直しが本格的に始まることが報じられた2009年5月までの25年間に掲載された合計141件の記事を対象として取り上げることとした。これらには、競輪場以外にも、花月園観光株式会社、京浜急行電鉄花月園前駅、花月園前踏切といった関連語句を含む記事が含まれている。各紙記事数の内訳は、朝日64件、読売25件、毎日46件、産経6件となる。本稿では、関連する記事数の多い朝日の記事を中心に上げつつ、読売、毎日、産経の各新聞の記事を用いて補うこととした。計量的な内容分析を行うことを目指してはいないため、ごく簡単に花月園に触れている記事については言及せず、重要なものを中心に上げてある。引用した記事の見出しとその表記についてはデータベースの検索結果をそのまま反

映させてある。なお、朝日、毎日の見出し内にある「／」および読売の見出し内にある「＝」以下の地名は関係地域を表している。

Ⅲでは、選定したこれらの新聞記事を基に花月園競輪に関わる事象の変遷過程をたどっていく。全体の流れを俯瞰したところ、大きく四つの時期区分を設定できることが事後的に判明したため、それぞれの区分ごとに記述していくことにしたい。

2. 花月園競輪場跡地界隈の概況

花月園競輪場が閉鎖されるまで、神奈川県は、川崎、花月園、平塚、小田原の合計四つの競輪場を有しており、最も多くの競輪場を持つ県であった。花月園競輪場閉鎖後、名古屋、豊橋、一宮の三つの競輪場を持つ愛知県と並んだが、2014年3月16日をもって一宮競輪場が閉鎖となったため（経済産業省製造産業局車両室 2014）、2015年7月30日現在、全国で43の競輪場が33の道府県に存在しているなかで、神奈川県は最も多くの競輪場が立地する自治体となっている（経済産業省製造産業局車両室 2015）。

Iで述べたように、花月園競輪場の所在地は鶴見花月園の跡地である。その敷地は総持寺の南に位置する東福寺の南西側に広がっており、そもそも鶴見花月園は東福寺の境内の敷地を取得して造成された。

花月園競輪場跡地は、JR鶴見駅西口からは徒歩で約10分、京急本線花月園前駅からは徒歩約3分の距離にある。周囲には、コンビニエンスストア、数件の飲食店がある程度で、確固とした商店街が形成されてはいない。他方、花月園前駅東方面側には「花商会」商店街が形成されている。

花月園前駅の西方面に出ると人道橋（写真1）があり、そのまま花月園競輪場跡地へと続く通路（写真2）につながっている。進行方向右手側には日本有数の長さといわれる花月園前踏切（写真3）があり、横須賀線、京浜東北線、東海道本線、東海道貨物線、京急本線が通過している。通路

左手側には現在、コイン式駐車場が設けられているが、以前はJFE（旧日本鋼管）岸谷社宅が立地していた。



写真1 花月園前人道橋（2012年12月8日筆者撮影）



写真2 人道橋から続く通路横の看板（2012年12月8日筆者撮影）

右手に鶴見一・二丁目町内会館や鶴見乳幼児福祉センター保育園をとらえながら左曲がりの坂道を登っていき広域避難場所の看板（写真4）を過



写真3 花月園前踏切（2012年12月8日筆者撮影）



写真4 歩道脇の避難場所看板（2012年12月8日筆者撮影）

ぎると、花月園競輪場駐車場入り口（写真5）が見えてくる。入り口脇には往時の花月園を偲ぶ案内図（写真6）が掲げられている。



写真5 花月園競輪場駐車場入り口（2012年12月8日筆者撮影）

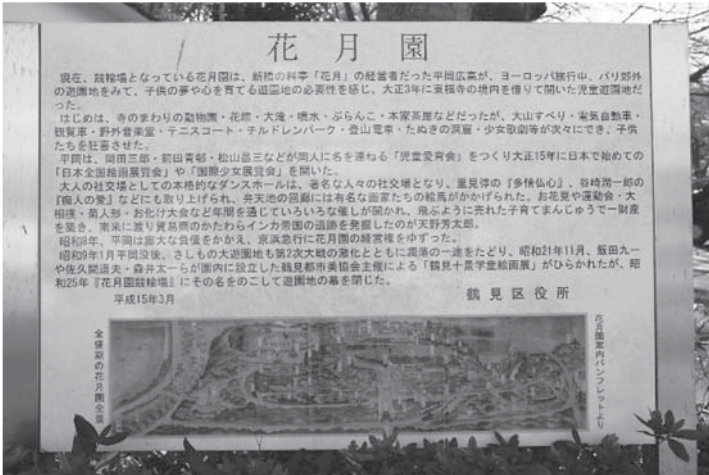


写真6 往時の花月園を偲ぶ案内図（2012年12月8日筆者撮影）

Ⅲ 新聞記事からみた花月園競輪等の表象

1. 競輪事業の活況と多様な空間（1985年5月～1992年10月）

1) 競輪場の活況

1980年代の花月園競輪に関連する記事は少なく、それらは、競輪開設以前を話題としていたり、花月園競輪について間接的に言及していたりする程度で、花月園競輪の様子を詳しく報じるものではなかった。ただし、1980年代の終盤になると一転して経営状況を詳しく報告する記事が現れるようになっていく。

1989年3月20日「ヨコハマダービー初日の入場3万人」『朝日』では、5大特別競輪のなかでも最高のタイトルとして知られる日本選手権競輪の第42回大会（ヨコハマダービー）が19日に花月園競輪場で始まったことが報じられた。「観覧席はほぼ満員の状態で、夕方までに11レースが行われ、終日の入場者数は3万2000人。場外車券売り場をあわせると、この日1日だけで約45億6000万円の売り上げがあった」こと、また、「県公営事業所では6日間の入場者数15万5000人、総売り上げ280億円を見込んでいる」ことが述べられており、花月園競輪が当時、大変な活況を呈していたことを窺い知ることができる。事実、花月園競輪は前年の88年にその歴史のなかで最高の売り上げを記録している。

1989年5月19日「松尾亮佑・花月園観光専務 豪華メインスタンド改築（拡大鏡）」『朝日』の記事では、60億円をかけてメインスタンドを改築したことで、客一人あたりの車券購入額が前々期に比べて17%増加したことが報じられ、「設備を豪華にするほど収入が増える。リッチな時代の競輪にイメージチェンジです」との花月園観光の松尾亮佑専務によるコメント

が掲載されている。

1990年代に入っても、こうした景気のよい時代を反映してか、1990年5月18日の「[決算ミニレポート] 競馬に追いつけ！競輪場…花月園観光」『毎日』では、経営状況が以下のように記述されている。

競輪場の賃貸料が売り上げの六割を占める花月園観光の松尾亮佑専務は「入場者数は横バイだが、お客の一日当たりの車券売り上げが前年に比べ五%伸び、初めて一人平均五万円台に乗せた」と順調な収入増だったことを報告。ただ競馬に比べて女性や若者に人気がないのが悩みのタネとか。「施設改善を進め、快適な環境で車券を買ってもらいたい。ナイター開催も将来的には検討課題になる」とファン層拡大に懸命。

ファン層拡大にとっての課題を受けて、1991年には、設備を単に豪華にするだけでなく、女性や若者という新たな顧客を取り込むための対策が取られている。1991年6月19日「『ギャル集まれ』競輪場大変身 冷暖房、禁煙の観覧席あたり前」『毎日』の以下のリード文にはそのことが端的に示されている。

40代以上のオジサンたちの危険なギャンブルという、暗い印象が強かった「競輪」がイメージチェンジを図りつつある。競輪場をデラックスに改装し禁煙席を設けたり、女性のための入門教室を開いたり……。明るく、おっしゃれーに変身し若者ファンを増やそうというわけだ。競馬に負けじとガンバル、イメチェン競輪——。果たしてギャルたちの心をつかめるのか。

この記事では、「全国50カ所の競輪場売り上げは、場外車券売り場の好調もあり順調に伸びているものの、入場人員は86年の2726万人が90年は2748万人と横バイで、40、50代の男性が中心と高齢化が進んでいる」状況を打開する方策として、前橋競輪と花月園競輪の事例が報告されている。花月園競輪場について言えば、「88年に冷暖房、屋根付きでドリンクサービスの特別観覧席（1144席）を設置。さらに『女性が安心して見られるように』と現在、女性専用の『レディス・スタンド』を建設中」として、先進的な取組みが行われている様子が報告され、関係者による「『昔の鉄火場の雰囲気を改め、若者までファン層を広げなければダメ』（花月園競輪場）」とのコメントも載せられている。

こうした花月園競輪による取組みは、1992年3月18日「競輪も女性客拡大作戦 専用ロビー設置、女子競輪復活も／通産と自転車振興会」『読売』でも、先進的な事例として報じられている。

女性客急増の競馬に負けじと、通産省と日本自転車振興会は、女性の競輪ファン拡大作戦に乗り出すことになった。作戦第一弾として、三月一日、横浜市の花月園競輪場に、わが国の公園^[ママ]ギャンブル場としては初めての女性専用ロビー（特別観覧室、約二百十六平方メートル）を開設したほか、かつて行われていた女子競輪の“復活”の検討にも乗り出す。競輪場イコールギャンブル場とのイメージをぬぐい、競馬や相撲などのように、楽しく観戦できるスポーツ競技にしたい考えだ。

この記述からは、女性客獲得に成功した競馬に追随する方策を必死に模索している様子が伺える。同記事では、「平成二年度、競馬場を訪れた女性観客は、全体の10.6%。これに対し、競輪場の方は3%台にすぎない」というように、競馬と競輪の女性観客比率が対置され、競輪の劣勢が伝え

られている。

1992年8月13日「競輪場、女性客にターゲット ペア席新設 競馬人気にあやかれと大阪・岸和田市」『読売』でも、岸和田競輪場の取組みを紹介するなかで、「全国競輪施行者協議会（東京）によると、各地の競輪場でも、女性に照準を合わせた企画が行われ、三月に全国初の女性用観覧席を設けた横浜市・花月園競輪場も人気上々」だということが報じられている。

この時期の報道を概観すると、花月園競輪の活況から売り上げのピークを経て、ファン層拡大のための設備投資によって今後予想される売り上げの下降を十分乗り切ることができると考えられていた様子が把握できる。⁽¹⁰⁾

2) 事件・事故の報道

他方、1990年代初頭は、華やかな面だけではなく負の側面を伝える報道が相次いでいる。

1990年には、花月園競輪などのレースにからむ自転車競技法違反（ノミ行為）の容疑者が逮捕されたとの記事が連続して掲載されている。7月11日「競輪ノミで逮捕 横浜・神奈川」『朝日』では、神奈川区東神奈川の Snackbar で行われた花月園競輪でのノミ行為を神奈川署が、8月25日「ノミ行為容疑の2人を送検 川崎臨港署」『朝日』では、川崎市川崎区大島2丁目にある喫茶店での花月園競輪のレースに関するノミ行為を川崎臨港署が、10月2日「ノミ行為容疑で送検」『朝日』では、JR川崎駅前での花月園競輪と中山競馬のレースに関するノミ行為を川崎署が、それぞれ取り締まったことが報じられた。

他の事件関係では、1992年3月6日「すりの現行犯で逮捕 横浜」『朝日』によると、鶴見署が、5日までに京浜急行電鉄花月園駅前構内ですりの容疑で男を逮捕したことがわかる。

事故関係では、花月園競輪場の最寄り駅である花月園前駅周辺の出来事として、1991年3月31日「成田エクスプレスで人身事故 横浜・鶴見区の踏み切り」『朝日』では、30日に、横浜市鶴見区生麦5丁目のJR横須賀線花月園前踏切において、成田空港発横浜行き下り特急「成田エクスプレス18号」に男性がひかれて死亡したことが報じられている。

以上のように、この時期の中心的な話題が経営の活況であったのに対して、その裏面として「犯罪」報道も頻繁になされていたことがわかる。

3) 子どもの空間としての花月園

上述した報道の主要な動向からは外れるものの、1980年後半の記事で注目に値するものとして「子どもの空間」に関する記事がある。

1988年11月9日「最優秀賞に斎藤君ら35人 神奈川県少年少女絵画展」『朝日』の記事では、8日に発表された第37回県少年少女絵画展の入賞作品が12日から20日まで、当時花月園競輪場に隣接して存在した神奈川県立花月園こどもセンター体育館に展示されることや、1989年12月31日「新春ガイド：下 神奈川」『朝日』では、同センターで、お正月まつりが開催され、人形劇、模擬店、映画会などの催しが行われることが報道されている。

かつての花月園の記憶を引き継ぐような「子どもの空間」が展開していることが示されており、競輪というギャンブルの空間だけに収斂しない多義的な空間として花月園競輪場の立地する空間が存在していたといえるだろう。⁽¹⁾

2. 競輪事業の転換点と子どもの空間（1994年1月～1999年9月）

1) 経営不振と場外車券場

1985年から1992年まで連続していた花月園に関する新聞記事は、1993年

には1件も掲載されなかったが、1994年に入ると復活する。5月21日「〔決算ミニレポート〕頭痛い入場者減——花月園観光」『毎日』、11月17日「〔決算ミニレポート〕94年9月中間期 競輪場収入落ちた——花月園観光」『毎日』、11月17日「〔決算 反射鏡〕競輪にも不況風 花月園観光」『産経』のように、1990年代初頭までの活況が一変したとする記事が登場することになる。たとえば、5月21日の『毎日』では、「とくに年間入場者数が前期比10万人減の95万人にとどまり、32年ぶりに100万人を割り込んだ」と報道されていることから、この時期、競輪事業が大きな曲がり角に直面していたことがわかる。

それは、1995年の本社移転の報道にも現れている。5月20日に4紙が一斉に花月園観光の松尾嘉之輔新社長就任の人事を報じるとともに、同日の「競輪場の中に本社を移転 花月園観光（決算から）」『朝日』では、花月園観光が、「横浜駅西口のオフィスビルにある本社を、自社所有で横浜市鶴見区にある競輪場の中に」移転することが明らかにされた。松尾嘉之輔専務による「バブル崩壊後、客足が鈍り、若い女性に人気がある競馬にあやかっただけで全国初の女性専用スタンドも設けたが、思うように伸びない。本社の家賃など約三千万円を圧縮しようと、引っ越すことにした」との談話が掲載されている。同じく5月27日「『増収増益』まだら模様 決算、全国で500社以上発表（時時刻刻）」『朝日』のなかでも、本社の移転によって、年間4千万円の賃貸料が削減されること、「女性専用スタンドも導入したが、まだ新しいファンの開拓にはいたっていない。当面はコストを下げるよりしかたない」との松尾嘉之輔専務の談話が掲載されている。

1996年には目立った動きが見られなかったものの、1997年になると再び大きな動きが報道されている。9月18日「花月園競輪場経営立て直しへ共同で事務組合 県と横浜市など」『朝日』、9月20日「〔トピックス〕競輪事業組織をスリム化 / 神奈川」『毎日』といった報道では、経営改善

のための改組計画が公表されている。『朝日』では、9月17日に県、横浜、横須賀両市が、「経営の立て直しのため、来年度から共同で競輪事業を営する一部事務組合『県競輪組合（仮称）』を設立」する意向であることと、「組合設立は、十二月定例県議会、両市議会に提案され、可決されれば、来年四月に設立される」と報じられている。

この記述の通り、12月2日の「12月県議会が開会」『朝日』、12月2日「県競輪組合設立議案など提案——定例県議会、開会／神奈川」『毎日』では、花月園競輪場の競輪事業経営において、神奈川県、横浜市、横須賀市が事務組合「県競輪組合」を設立する案が提案されたことが報じられ、12月5日の「『収益安定化』と市長強調『県競輪組合』設立問題で横浜市」『朝日』でも、4日から開始された横浜市議会に、組合の設立に関する議案が提出されたことが報道されている。12月5日の『朝日』では、高秀秀信横浜市長のコメントも記されており、共同事業化のメリット、「組織のスリム化、収益の安定化」を上げ、「全国で百八十一の自治体が十九の一部事務組合を結成して競馬事業を運営しており、そのうち十組合が黒字と指摘」。競輪事業の低迷には、「景気低迷とレジャーの多様化が背景」としている。

このように経営の立て直しが図られる一方、場外車券場を開設することで競輪事業を拡大しようとする動きも出てくる。⁽¹²⁾

1997年9月8日「田富町の競輪場外車券場建設、全会一致で反対決議——三珠町住民総会／山梨」『毎日』では、山梨県田富町大田和に花月園観光株式会社が建設を計画している場外車券場をめぐる、「建設予定地に隣接する三珠町大塚桃林橋地区（丹沢良男区長）の住民が6日夜、住民総会を開催、交通渋滞などを理由に建設反対を全会一致で決議した。建設予定地は、笛吹川で分断された田富町の「飛び地」だが、田富町側は三珠町住民の意思を尊重する意向を示しており、反対決議は、今後に大きな影

響を与えそうだ」と報じている。

翌年にも他所で、着工が決定した競輪場外車券場めぐり反対運動が起きている。1998年10月2日「場外車券場、今月着工へ 横浜の競輪業者が
出資 石鳥谷」『朝日』によれば、石鳥谷町の競輪場外車券場「サテライト石鳥谷」が、花月園観光の梶子入れによって着工されることが報じられている。資本参加を依頼された花月園観光が、石鳥谷町の車券場運営会社・平安企画に、資本金の75%にあたる一億五千万円を出資することが決まったことにより着工に漕ぎ着けたという。しかし、そこまでに至る過程で、車券場の誘致に関わる贈収賄事件が発覚し、建設に反対する住民運動も起きており、「建設に反対する住民団体は一千人を超す反対署名を集め、同年九月には建設反対の請願を町議会に提出したが、町議会は不採択としていた」。反対派の住民団体「クリーン石鳥谷の会」の副会長による、「署名を無視した着工は町民にとって不幸だ。町の財政が本当に潤うのか、治安上の問題はないのか、しっかり監視していく」との談話も紹介されている。

こうした花月園観光が関わる場外車券場の建設計画をめぐる地元住民の反発は、後の章でみるように、横浜市内では大きな立地摩擦に発展することとなる。

他方、1999年9月には、『朝日』が「公営ギャンブルの明日」と題する特集記事を連載し、低迷する競輪業界の全体的な動向や関東地方の競輪場における対策や内幕などを詳しく報じるなかで、花月園競輪も取り上げられている。この連載のなかで、花月園競輪が出現する四つの記事の内三つは、川崎競輪を紹介するうえでの補足として花月園に触れている程度であるものの、1999年9月4日「隠れた主役（最終コーナー 公営ギャンブルの明日：4）／神奈川」『朝日』では、花月園競輪で営業する一人の「予想屋」の生い立ちや活動内容が詳述されている。

2) 事件・事故の報道

この期間の事件報道では、他の時期区分と比較してノミ行為と営業妨害行為の報道が顕著である。1994年には、1月7日「ノミ行為、2人逮捕／神奈川」『毎日』と1月12日「ノミ行為で逮捕——伊勢佐木署／神奈川」『毎日』の2件、1995年には、12月2日「ノミ行為で暴力団組員逮捕——横浜／神奈川」『毎日』の1件、1996年には、6月11日「寿町でノミ行為、組員ら逮捕——横浜／神奈川」『毎日』の1件、1999年には、1月30日「ノミ行為で横浜の暴力団組員を逮捕＝神奈川」『読売』と2月12日「ノミ行為の疑いで三人逮捕 神奈川署と県警」『朝日』（朝刊 神奈川）の2件とといったように、花月園競輪に関係したノミ行為（自転車競技法違反）の摘発について何度も報道されている。

頻度ではノミ行為に遠く及ばないものの、大きく報じられた事件として営業妨害行為が挙げられる。1999年7月21日には、競輪レースの妨害があったことを各新聞が、「コース上に油、レース見送り 花月園競輪場／神奈川」『朝日』、「花月園競輪場でコースに油 全レース順延＝神奈川」『読売』、「油まかれ、競輪が中止 売り上げ4億円フィー—横浜・花月園競輪場」『毎日』、「競輪コースに油べったり 花月園レース順延」『産経』のように一斉に報じている。このうち『朝日』の記事をみると、20日早朝、花月園競輪場のコース内に幅0.5メートル、長さ7メートルに渡って油のような液体が付着しているのが発見され、当日予定されていたレースすべてが中止になり、「競輪場は夜間でも開放されており、何者かが観客席から金網フェンス越しに油を流した疑いが強い」との見立てによって、鶴見署が威力業務妨害の疑いで捜査を開始したことがわかる。

その他の報道では、事件として、1994年8月5日「花月園ですり逮捕」『毎日』、事故に関しては、1996年5月18日「列車にはねられ男性即死 横浜／神奈川」『朝日』で、JR横須賀線花月園踏切で前日に起きた人身事

故の記事がある程度である。

3) 子どもの空間の消滅？

上述した一連の経営合理化の波は、花月園競輪が立地する空間が有してきた意味内容に大きな変容を迫ることになる。1998年3月16日「閉鎖後は競輪事務所！？ 横浜・鶴見区の県立こどもセンター」『朝日』では、神奈川県立花月園こどもセンターが年度末で閉鎖され、県競輪組合の事務所として貸し出されることになると報じられた。県は1996年2月に、行政改革の一環として「市町村との役割分担を明確にし、地域の青少年育成事業を市町村に任せるといふねらいでセンター廃止の方針を打ち出し」ていた。1146文字の記事では、閉鎖に異議を唱える地元の声とともに、事実上2月末に閉館し静まりかえったセンターの様子が写真入りで紹介されている。以下に一部を引用する。

地域の要望を受け、県は今後も一部の部屋をサークル活動などに使えるようにした。だが、センター主催の子ども向けクラブ活動はなくなり、これまでのように子どもだけで自由に施設を使うこともできなくなる。「都会の真ん中の数少ない子どもの遊び場を奪わないで」との声は根強い。……中略……地元では「子どもを取り巻く環境が悪化している中、行政はもっと子どものための施設を充実させることに知恵をしぼるべきだ」という声があがる一方、「地域の児童数が減っている以上、仕方がない」というあきらめの声もある。

このように閉館に対する戸惑いの声は、1998年3月27日「読者のプラザ」『朝日』の「子らの遊技場、存続へ再考を」と題した横浜市在住の35歳男性からのコメントにより詳しく表れている。

私は小学校に通っていた三、四年間、帰宅すると毎日のように利用しました。当時は大変珍しかった子ども専用の図書館があり、最新刊をむさぼり読んだ記憶があります。屋内運動場では、指導員のもとでマットや跳び箱で遊びました。七夕、もちつき大会などの季節の催しでも、楽しませてもらいました。

近ごろでは少子化やテレビゲームなどの普及で、センターの利用率はかなり減っているのでしょうか。維持にも多くの費用と労力がかかるのもわかります。「まだ娯楽が少なかった時代の、子どもの遊技場」としての役目は終わった、という見方もあるでしょう。

しかし、このような施設はいつか、再び必要となる時が来るはずです。ぜひとも、子どもが自由に利用できる利用法で、存続できないでしょうか。再考をお願いします。

神奈川県立花月園こどもセンターは、戦前の児童遊園地鶴見花月園の記憶を引き継ぐ場所でもあったと考えられるが、体育館など関連施設は残されたものの、センターの閉鎖によって制度的な継承は途絶えることになった。

翌年には、かつて存在した児童遊園地の追憶を詳細に述べた記事が掲載されている。1999年8月22日「[ランドマークが見た100年] 娯楽(2) 鶴見「花月園」(連載) = 神奈川『読売』は、全2,126字に亘る記述のなかで、事業家平岡広高による創業の経緯と最盛期の遊園地の活況を中心に、花月園競輪への転換へと至る過程を描いている。最盛期の規模の大きさ、多彩な催し物、来園者の記憶は次のように語られている。

二万五千坪(約八万二千五百平方メートル)でスタートした園は、第一次大戦後の好況に乗って大正末から昭和にかけてピークを迎え、七万

坪（約二十三万平方メートル）にまで拡張された。

一九二〇年（大正九）に開設したダンスホールは、外国人や外交官らの社交場となり、宝塚少女歌劇団と交流のあった「少女歌劇」は、童話歌劇の創設を目指した。また、国内初の全国児童画展の開催や関東初の室内スケートリンクの開設など、豊かなアイデアを次々に実現していった。

特に夏休みは企画が多かった。賞品付きの駆けっこや大相撲。「立ち木を並べた迷路のお化け屋敷は、毎年行ったよ。ろくろ首が出てきたり、突然、奇妙な悲鳴が聞こえたりしてね」。「鶴見歴史の会」会長の横浜市鶴見区東寺尾、伊藤実さん（71）には、花月園が遊び場だった。「小学校の授業中も園から歌が聞こえてね。にぎやかさが教室に入ってきてちゃうんだ。勉強なんてやってらんないよ」

そして、記事は、「鶴見の丘にこつ然と現れた子どもの楽園は、“遊園地の開祖”の夢を一時、現出して歴史の中に消えた」と結んでいる。

3. 経営改善と遊楽都市（1999年12月～2004年3月）

1) 本格化する経営改善

1999年の年末に、後に問題となっていく動きがある。12月22日「県所有の花月園競輪場敷地、リース会社に売却へ リースバック方式で＝神奈川」『読売』では、花月園競輪場の敷地が、自治体では全国初の一般競争入札で都内のリース会社（ダイヤモンドリース）に43億円で売却されることが決定されたと報じられている。財政難の神奈川県にとって多額の売却益を得られることは魅力だが、「一方で、長期の買い戻しの割賦料や賃借の利息分が生じるため、買い戻すまでには売却益を上回る支払いは避けら

れない。今回も三十年間の貸借期間の“利息分”として、県は約二十六億円を負担することになる」との解説が付された。

この売却については、2000年の4月3日「都道府県、資産740億円放出 昨年度、朝日新聞社調べ」『朝日』や12月5日「[財政再建の闇] 膨らむ県借金の行方を追う 県有財産／神奈川」『毎日』、2001年2月28日「県バランスシート、正味財産4兆2179億円——前年度比488億円減／神奈川」『毎日』でも報じられている。売却自体は、競輪事業というよりは県財政全体の立て直しの一環であったのだが、後に花月園競輪の跡地をめぐる議論において再び焦点となっていくことになる。

2001年の上半期には、競輪事業への直接的な言及が一気に増加する。まず、2月23日の「横浜市、競輪事業見直し検討 累積赤字20億円超か」『朝日』では、入場者が減少傾向にあり、1998年度の売上高が2年間で約90億円も減少し、累積赤字も20億円を超える見込みであることから、高秀秀信横浜市長が、22日の市議会本会議において、神奈川県競輪組合の競輪事業見直しを検討することを発表したことが報じられる。市経済局の北園義広総務課長による「『はじめに撤退ありき』ではないが、競輪事業が全国的に曲がり角を迎え、相当な危機感を持っていることは事実。今後、県や横須賀市とも慎重に協議したい」との談話が掲載されている。

実際にはこの数値以上に収益が悪化していたことが、4月24日「県競輪組合の再建へ経営検討委 花月園・特別観覧席半額に」『朝日』の記事で明らかになる。県と横浜市、横須賀市によって、競輪事業の見直しを検討するために「3自治体の部局長や同組合の副管理者らで構成し、外部の識者からも意見を聴く」「経営検討委員会」（仮称）の設置が決定したこと、そして、神奈川県競輪組合がまとめた「人員や開催日数を見直し、総人件費や開催経費を4割程度減らすことを目指す」経営改善計画の内容を併せて紹介する報道内容なのだが、記事中にみられる「2年で100億円以

上も売り上げが減った」や「累積赤字は25億円を越す見込み」というように、数値の悪化が前回の報道を大幅に超えていたのである。

不況の影響で2年で100億円以上も売り上げが減った経営を立て直し、03年度までに単年度黒字を目指す。……中略……全国競輪施行者協議会によると、神奈川は花月園、川崎、小田原、平塚の4競輪場が競合する全国一の過密地帯。不況の影響もあり、入場者は減っている。売上高は98年度が416億円、99年度は367億円。00年度は約280億円に落ち込むと見られている。

赤字額は98年度が約8億円、99年度が約5億2千万円。00年度も12億円以上と予想され、累積赤字は25億円を越す見込みだ。

競輪事業の経営合理化を狙って1998年4月に神奈川県競輪組合が設立された経緯を前節でみたが、それ以後2001年まで経営が悪化している状況は報道されていなかった。そのため、状況がまったく改善していなかったという事実は、内情を知る機会のなかった一般読者にとっては大きな衝撃を持って受け取られたと思われる。

こうした大変厳しい経営状況を乗り越える方策として、若者の取り込みを第一の課題として取り上げる報道が続くことになる。2001年5月18日「競輪場施設のナイター整備し集客 花月園観光（決算から）」『朝日』では、ナイター競輪への対応を見込んで照明設備への投資計画があり、花月園観光の「夜間なら若者が競輪場に足を運んでくれるはず」との期待が述べられている一方、「数年前に若者層を引き付けた競馬に比べ『周回遅れ』の感もある」と記者は指摘している。このように、2001年には、経営合理化が急務であることが伝えられた。⁽¹³⁾

ただし、2002年には人気回復を後押しする報道もある。6月25日「花月

園競輪3連単で151万9270円の高額配当（ハーフタイム）」『朝日』、同日「競輪3連単で史上2位の約152万車券出る／花月園競輪」『読売』は、24日の花月園競輪のレースで、「3連単としては、昨年12月の前橋競輪で出た154万20円に次いで史上2番目」の151万9270円の高額配当が出たと報じている。

また、事業拡張の動きとして、2002年の7月10日「若草でも車券場計画＝山梨」『読売』と7月11日「若草町にも車券場計画 地区住民ら、町に建設要望」『朝日』の報道にみられるように、花月園観光が山梨県若草町にも競輪の場外車券場を建設を計画していたことがわかる。これは、神奈川県外の動きでありその後頓挫した計画であったため続報がみられなかったが、次章で詳しくみるように、神奈川県内において場外車券場の進出が立地摩擦を引き起こすようになると、神奈川県版の紙面でも積極的に取り上げられるようになっていく。

2003年、2004年には、それぞれ2002年、2003年に導入された設備改善の方策について報道がある。2003年5月24日「競輪も若返りに躍起 花月園競輪場（決算から）」『朝日』で、松尾嘉之輔社長による「ファンの高齢化が一番の課題。競馬みたいに若者を呼ばなければ」とし、2002年に開設された特別観覧席「サイクル・ベイ・カフェ」が、「土日はいつも予約でいっぱいの状態。今度こそ、若者に新しい競輪場のイメージを与えられるはず」との期待が報じられ、2004年5月22日「マメに買い大穴狙う 花月園観光の松尾嘉之輔社長（決算から）」『朝日』でも、2003年4月に「観覧席に座ったまま車券を買えるシステム」が導入されたことが報じられている。

なお、この時期の事件事故の報道は、前節の時期と比べて極端に少ない。事件に関しては、2001年11月9日「競輪でノミ行為の疑い、マージャン店主逮捕 十和田署」『朝日』が、十和田市東三番町のマージャン店「ロン」

における花月園競輪のレースに絡む自転車競技法違反（ノミ行為）の疑いで、同マージャン店経営A容疑者（49）の逮捕を報道し、事故に関しては、2004年3月27日には、26日に京急花月園前駅付近で、神奈川新町駅助役が落下物の捜索中に品川発京急久里浜行きの快速特急電車にはねられ死亡したとの記事を『朝日』『読売』『毎日』が報じている程度である。

2) 遊樂都市を構成する花月園

2003年8月から9月にかけて、『毎日』が、毎日新聞横浜支局の後援により横浜開港資料館で開催された「遊樂都市 横濱」の内容を紹介するなかで、花月園についても触れている。

8月27日「娯楽の良さ見直す「遊樂都市 横濱」-芝居・映画 エトセトラ- / 神奈川」『毎日』では、「幕末・開港以降の横浜の芝居・見世物・寄席・映画などの娯楽をもう一度見直そうと……（中略）……映画、芝居に関連する絵はがきや写真、映画館のチラシなど約200点が展示されている」とのイベント趣旨や、展示記念講座の第5回として10月11日（土）開催予定の「遊園地の系譜と鶴見花月園（平野調査研究員）」を紹介している。

9月20日「遊樂都市・横濱 花月園—遊園地の「源流」 / 上 / 神奈川」『毎日』でも、前出の横浜開港資料館調査研究員平野正裕の署名入りで、「鶴見の花月園といえば今日は競輪場として知られている。しかし、花月園を遊園地として記憶しているとすれば、相応の年配の方である。競輪場となってからでも半世紀以上。花月園最盛期の大正末—昭和初期から勘定すれば、4分の3世紀にもなる」と追憶へと誘う書き出しから始まり、往時の鶴見花月園の活況を簡潔に示して、「戦後展開する遊園地の源流を求めるなら、大規模な機械遊具と施設とに彩られた花月園こそがそれにあたる」との見解を紹介している。9月26日「中田市長、「遊樂都市」展を見学——横浜開港資料館で / 神奈川」『毎日』でも、市長が「日本でも有数

の遊園地「花月園」の案内図などに興味深く見入っていた」様子が紹介されている。

4. 経営改善の限界と歴史文化の空間（2004年5月～2009年5月）

1) 場外車券場の進出と立地摩擦

前節でみたように、経営改善が喫緊の課題となっているなかで、事業拡大の方策として場外車券場の展開が進められていったのだが、2004年に大きな動きがみられた。1998年の場外車券場開設の動きとも被るが、今回は横浜市内での展開となるため県内版紙面において大きく報じられている。

2004年5月10日「桜木町駅前ビルに競輪車券場計画が浮上 横浜・中区」『朝日』では、JR桜木町駅前の商業ビル「桜木町びおシティ」（横浜市中区）に開設予定の競輪の場外車券売りの概要が詳しく紹介されている。そのなかで、地元の小学校の保護者から、学区内にすでに競馬の場外売り場「ウインズ横浜」「エクセル伊勢佐木」があり、3カ所目の場外売り場新設計画への懸念の声上がっている。

週末になると一部の利用者が地面に座り込んで酒を飲んだり、子どもの頭をなでたりすることに、不快感を示す保護者もいる。新しい売り場は、これまでの2カ所と違って平日も販売し、児童の通学時間帯や通学路と重なるため、神経をとがらせる。

同小PTAは、東京の会員制の場外車券売り場を見学し、同社から今回の計画について説明を受けた。会長の松浦宏さん（46）は「新設されること自体を知らない人が多いので、もっと周知してほしい」。3年生の長男と1年生の長女がいる主婦（41）は「平日も開くのでは利用者はもっと増えるのでは」と業者の見通しに疑問を持つ。

ここには、「子どもの空間」への浸食に対する不安が如実に語られている。9月19日「[こちら横浜支局] 開設準備進む「会員制競輪場外車券売場」=神奈川『読売』においても、「治安悪化懸念し反対 新たな集客の期待も」「レジャー施設か、迷惑施設か」との対立軸を示しつつ、地元商店街の反対派と賛成派による次のような見解が掲載されている。

地元住民ら約六十人でつくる「競輪施設設置反対 横浜市民の会」の代表の一人で、野毛地区で料理店を経営する藤沢智晴さん(57)は、「ノミ行為をする者が街に出入りし、暴力団の資金源になる恐れがある。目先の利益にとらわれない長期的な街のあり方を考えるべきだ」と話す。

市民の会は九月九日、七千五百十六人分の署名を添えて、横浜市議会議長あてに開設反対の決議などを求める陳情書を提出した。二万人以上を目標に、さらに署名活動を展開中だ。

ぴおシティの地下で中華料理店を経営する金子トヨさん(63)は、「周りの店はどこも四苦八苦している。三十年以上やってきたこの店をたたまずに済ませるためにも、人が集まる施設は必要」と歓迎する。

また、大通りを挟んだ野毛地区ですし店を経営する鈴木清さん(71)は、「通りが違えば、影響はない。近くには場外馬券売り場もあるし、特に反対はしない」と冷静だ。

こうした大きく対立する見解が決定的な立地摩擦へと発展していく。11月30日「場外車券売場、桜木町駅前オープン(インサイド 検証報道)」『朝日』のリード文では、「東急東横線の桜木町駅廃止で影響を受ける周辺地区では、進出を歓迎する声がある一方、『街のイメージ』を重視する住民らは設置許可取り消しを求め提訴。30日に第1回口頭弁論が開かれる。進

出をめぐる「現金攻勢」も表面化し、混乱が続いている」として、競輪の場外車券場「サテライト横浜」開設に伴う立地摩擦を詳しく紹介している。その根幹が述べられている箇所を引用してみたい。

びおシティは地上10階、地下2階のビル。5階に診療所、歯科診療所がある。約200メートル先に市立本町小学校もある。

自転車競技法などで、場外車券場設置には「文教施設や医療施設から相当の距離」があり、それらに「著しい支障を来すおそれがない」ことが必要だ。住民らは「基準に反する」として先月、経済産業相を相手取り、設置許可取り消しを求めて東京地裁に提訴した。

経済産業省車両課は「『相当の距離』がなくても著しい支障が出る恐れがなければよい。来場者は地下から専用のエレベーターを使う」とし、2町内会の同意撤回についても「同意は許可の要件ではない」とする。横浜市は「国が決めたこと」と静観する構えだ。

引用から明らかなように、行政はこの問題を成り行きに任せようとする姿勢を打ち出している。しかし、記事中には、横浜市と花月園観光の関係について、「サテライトの半分の株を持つ花月園観光（同市鶴見区）は、横浜市が資本金55%を出資し、市経済局長が非常勤取締役役に就任している。市との関係は深い」と指摘されている。つまり、横浜市は利害団体にもかかわらず無関係を装っていることが示唆されている。記事の最後には、こうした経緯について「街づくり施策に詳しい安田八十五・関東学院大教授（環境経済学）」による、「自然・生活環境より経済が優先される時代ではない。家族の住民が多い下町、文教地区らしい活性化策があるはずだ。すぐに客が入るからと公営ギャンブルに頼るのは安易ではないか」とのコメントも併記されていた。『朝日』の論調は批判的である。

このように2004年には場外車券場をめぐって立地摩擦が表面化したことがわかる。

2) 公営ギャンブルの窮状と花月園競輪の経営見直し

2005年5月31日「小倉競輪場」を民間委託の方針 来春から北九州市『朝日』では、「小倉競輪場」の民間委託案についての紹介する際、公営競輪場の業務民間委託をすでに実施している花月園競輪場の例が引かれていたが、県内の公営ギャンブルと比較する記事では、具体的な花月園競輪の経営状況が報告されている。

2006年9月8日「公営ギャンブル減速 県内4競輪・川崎競馬」『朝日』では、「不況やレジャーの多様化などで、全国的に厳しい経営が続く公営ギャンブル」に関して、神奈川県内4競輪・川崎競馬の現状が報告されており、「県内4競輪 入場者・売り上げ激減 集客、生き残り必死」として、花月園競輪の事例も紹介されている。花月園競輪を運営する県競輪組合については、「売り上げの減少は統合効果を上回り、初年度から赤字になった」とし、「窮状を打開するため、03年度に車券の販売や清掃、広告などの業務を包括的に委託し、開催経費を00年度より約40%削った。人員配置、賃金体系も大幅に見直し、700人いた従事員を03年度には225人に減らした」ものの、累積赤字が現在約36億円あるとしている。

さらに、2007年12月16日「(ルポ)小田原競輪場 “高齢男性の居場所” 拝見 市、存廃を検討」『朝日』では、県内にある4ヶ所の競輪場(川崎、花月園、平塚、小田原)のうち小田原競輪場の現状について報告するなかで、小田原市が発足させた競輪事業検討委員会が出された「経済だけではない効用がある。高齢者の受け皿になっている場所だ」との言葉が引用されている。この記事のなかで、花月園競輪については、丘の上にある花月園競輪で記者が競輪体験をするなかで聞いた「坂がきついから客が減って

いるんだ」との言葉が引用され、掲載された写真の説明でも「空きが目立つスタンド。エスカレーターなど設備充実に力を入れているが」というように花月園競輪場の苦境を指し示す風景が描写されている。

2007年末に報じられたこうした経営の窮状は、2008年中には報じられることはなかったのだが、2009年に入ると抜本的な解決策を求める動きがにわかには加速していくことになる。3月17日「赤字の花月園競輪場、来月から経営見直し＝神奈川」『読売』で、外部有識者による経営改善のための委員会が設置されることが明らかとなった後、4月23日には、『朝日』と『読売』がそれぞれ、「県競輪組合、経営改善へ検討委 外部有識者が初会合」『朝日』、「赤字の花月園競輪 検討委が初会合＝神奈川」『読売』の記事で、22日に初会合を行ったことを報じている⁽¹⁴⁾。

このうち『朝日』の記事は、神奈川県競輪組合（管理者・羽田慎司副知事）が、競輪事業の収益悪化を受けて、外部有識者でつくるあり方検討委員会を設けて、経営改善策を検討する初会合を行い、山田紘祥・文教大学国際学部教授（レジャー産業論）が委員長に選出され、競輪事業について「事務の効率化や経費削減を目的に組合は98年に設立されたが、県と横浜・横須賀両市に収益金が配分されたことはなく、累積赤字は07年度決算で44億円に達している」と報じている。

5月2日には『毎日』も、「競輪：組合と県・2市、経営改善へ検討委 赤字常態化で／神奈川」『毎日』で、委員会の発足の経緯を伝えており、「県競輪組合と県、横浜、横須賀両市は、赤字が常態化した経営の抜本的な改善策を考えるため、有識者による検討委員会を設置した。8月にまとめる報告書を踏まえ、同組合は来年度以降の経営安定化を図る」予定となっていたことがわかる。

なお、この時期には、事件についての報道はなく、事故については、花月園前踏切において2005年、2006年にそれぞれ1件ずつ発生していたこと

が伝えられている。2005年8月3日「鉄道事故：電車にはねられ、80歳女性が死亡——横浜のJR花月園前踏切／神奈川」『毎日』、翌日8月4日「JR踏切、80歳はねられ死亡 40メートルを渡り切れず 横浜・鶴見区／神奈川県」『朝日』では、人身事故について報じられている。『朝日』の記事では、「現場はJR横須賀線のほか、東海道、京浜東北、貨物各線の上下計8本と、京浜急行線の上下線2本の計10本が通っている。JR側と京急側の遮断機はそれぞれ別に作動している」と描写され、人身事故の背景として国土交通省が「開かずの踏切」として指摘していたことも紹介されている。

他の事故としては、2006年6月8日に、「JR横須賀線踏切で転倒、男性大けが／横浜・鶴見」『読売』、「鉄道事故：線路に男性進入、9万人超に影響——横浜・JR横須賀線」『毎日』の報道があった。

3) 歴史文化の空間

この時期、花月園の歴史文化に関わる出来事やイベントについて、『毎日』が積極的に取り上げている。

2007年10月8日「人文字：区制80周年祝う——横浜市鶴見区／神奈川」『毎日』では、横浜市鶴見区の区制80周年記念式が花月園競輪場において開催され、約1万人が訪れたことが伝えられている。

2008年2月2日「絵馬：戦前、花月園に飾られた11枚見つかる 横浜の元従業員宅から／神奈川」『毎日』では、「鶴見歴史の会」の齋藤美枝氏が元従業員宅縁の下にあった絵馬を発掘したことが、そして、2008年5月15日「出版：戦前、東洋一の遊園地「花月園」、地元史家が「秘話」をつづる／神奈川」『毎日』では、前出の齋藤氏が、花月園の成り立ちから当時の様子について創始者である平岡廣高の人生を辿りながら描いた著作『鶴見花月園秘話』（齋藤 2007）を出版したことが報じられている。

2008年8月5日「新任教師研修会：「歴史から学ぶ」林さん講演ー横浜・鶴見区役所／神奈川」『毎日』は、「今春に小、中学校に赴任した新任教師77人の研修会」において、「鶴見歴史の会」の林正己氏（80）による講演「鶴見の歴史から学ぶ」があり、「幕末の生麦事件、東洋一の娯楽場だった花月園遊園地など」の説明があったことを伝えている。

さらに、横浜開港150周年を迎えた2009年には、2009年2月20日「横浜開港150周年：音楽評論家・瀬川さん、ジャズの記念講演／神奈川」『毎日』が、鶴見花月園と日本のジャズの歴史との接点に触れている。

音楽評論家の瀬川昌久さん（84）が19日、「横浜とジャズ」と題し鶴見会館（横浜市鶴見区）で、横浜開港150周年記念の講演をした。区文化協会の主催で、約50人が参加した。

瀬川さんは「大正元（1912）年、横浜港を出港した米国航路船『地洋丸』に乗り込んだ波多野福太郎ら5人が日本初のバンドだった」と話し始めた。ジャズなど米国音楽を持ち帰り、大正9（1920）年に鶴見花月園にダンスホールができると、波多野が指揮する「ハタノ・オーケストラ」が人気を博した。

武石（2006）によればハタノ・オーケストラが花月園舞踏場で実際に活動したのは大正10～11年の間であったものの、この記事では、活動期間の長短ではなく、ハタノ・オーケストラが、設立間もない舞踏場を使用したことと、日本におけるジャズの紹介に果たした役割とが強調され、花月園の歴史文化を彩る経緯として示されている。

これらの報道⁽¹⁵⁾において、花月園競輪場が歴史文化の空間として積極的に語られ、鶴見区や横浜市の記念行事に歴史や文化の深みを与える要素としてたびたび言及されていることがわかる。

IV 結論

本稿では、新聞報道にみられる事物、出来事、空間に関わる表象に着目し、花月園競輪に関わる四つの全国紙（朝日、読売、毎日、産経）掲載記事の分析から、1985年～2009年までの25年間における花月園競輪に関わる事象の変遷をみてきた。その上で、花月園競輪に関わる空間が「レジャーの空間」としての意味を変容させていく過程の一端を明らかにしようとした。本論で四つの時期区分に沿って記述した各期間の論点を整理すると次のようにまとめることができる。

第1期として、1985年5月～1992年10月のあいだには、競輪事業が活況を呈したことが報じられ、入場者数や収益が最高潮に達した様子を把握することができる。売り上げのピークを経て、ファン層拡大のための設備投資が行われていき、それによって、今後予想される売り上げの下降を十分乗り切ることができると考えられていたことがわかる。

他方、1990年代初頭は、華やかな面だけではなく負の側面を伝える報道が相次いでいる。この時期の中心的な話題が経営の活況であったのに対して、その裏面として「犯罪」報道も頻繁になされていたことがわかる。

報道の主要な動向からは外れるものの、1980年後半で注目に値する記事として「子どもの空間」に関するものがある。往時の花月園の記憶を引き継ぐような「レジャーの空間」が展開していることが示されており、競輪というギャンブルだけに収斂しない多様で多義的な空間として花月園競輪場が存在していたといえるだろう。

第2期として、1994年1月～1999年9月のあいだには、競輪事業の転換点があったといえる。1994年に入ると競輪事業の客数が伸び悩んでいる状況が報道され、大きな曲がり角に直面していたことがわかる。競輪事業の

経営合理化を狙って1998年4月に神奈川県競輪組合が設立されるなど経営の立て直しが図られる一方、場外車券場を開設することで競輪事業を拡大しようとする動きも出てくる。それに伴い、地方各地で花月園観光が関わる場外車券場の建設計画をめぐって地元住民の反発が、花月園競輪場が立地する横浜以外の各地で起こっていたことを知ることができる。

この期間の事件報道では、他の時期区分と比較してノミ行為の報道が顕著であり、頻度ではノミ行為に遠く及ばないものの、大きく報じられた事件として花月園競輪場における営業妨害行為が挙げられる。

また、一連の経営合理化の波は、花月園競輪が立地する空間が有する歴史地理に大きな転機をもたらすことになる。神奈川県立花月園こどもセンターは、戦前の児童遊園地の記憶を引き継ぐ場所でもあったと考えられるが、センターの閉鎖によって制度的な継承は途絶えることになる。

第3期として、1999年12月～2004年3月のあいだには、経営改善が本格化したといえる。県財政全体の立て直しの一環として花月園競輪場の敷地の売却があり、厳しい経営状況を乗り越える方策として、若者の取り込みを第一の課題として取り上げる報道が続くことになる。なお、この時期の事件・事故の報道は第2期と比べて極端に少ない。

この時期には、2003年8月から9月にかけて、『毎日』が、自社の横浜支局の後援により横浜開港資料館で開催されたイベント「遊楽都市 横濱一芝居・映画 エトセトラ」の内容を紹介するなかで、遊楽都市を構成する空間として花月園を取り上げている。

第4期として、2004年5月～2009年5月のあいだには、経営改善の限界が露呈した。経営改善が喫緊の課題となっているなか、事業拡大の方策として場外車券場の展開が進められたことで、2004年には場外車券場をめぐって立地摩擦が表面化したことがわかる。地元横浜内での設置ということもあり各新聞が対立する見解を報じて立地摩擦の様子を伝えた。

この時期には、各地の公営ギャンブルの窮状が頻繁に紹介されるなかで、花月園競輪の窮状についても合わせても紹介された。2009年に入ると経営の窮状に対して抜本的な解決策を求める動きがにわかには加速していくことになり、「赤字が常態化した経営の抜本的な改善策」を練るため、神奈川県競輪組合、神奈川県、横浜市、横須賀市によって有識者による検討委員会が設置された。この動きは後に、単なる経営見直しに留まることのない根本的な対策へ結びついていくことになる。

この時期には、事件についての報道はなく、事故については、花月園前踏切において2005年、2006年にそれぞれ1件ずつ発生していたことが伝えられている。

他方、鶴見区制80周年と横浜開港150周年が重なったこともあり、花月園の歴史文化に関わる出来事やイベントが他の期間よりも多く、それらについて『毎日』が積極的に取り上げていた。花月園競輪場が、歴史文化の空間として積極的に語られ、鶴見区や横浜市の記念行事に歴史や文化の深みを与える要素としてたびたび言及されていたことがわかる。

以上、各期間の論点から読み解くことができるのは、一つに収斂されない花月園競輪に関わる空間の多義性である。花月園競輪場が立地していた空間は、競輪場におけるノミ行為などの事件および花月園前踏切や花月園前駅での事故といった「事件・事故の空間」という意味や、関連する場外車券場などが立地摩擦を引き起こす空間といった意味を含みつつも、同時に、鶴見花月園の記憶と共にある「子どもの空間」「歴史文化の空間」としての意味も創出してきた「レジャーの空間」として捉えることができるだろう。

本稿では、分析で用いる新聞記事を4紙としたことで記述が羅列的になった面はあるが、他方で資料を絞ったことにより25年間の経年的な変化を明確にとらえることができたと考える。今後は、競輪などの公営ギャン

ブルの凋落とレジヤーの多様化を跡づけながら、同時代の社会史と比較検討する作業も必要だろう。競輪場閉鎖後の跡地利用をめぐる経緯を含め、本稿で示した個別のテーマに焦点を当てた考察については、他日を期すこととしたい。

注

- 1) 花月園観光株式会社の会社沿革によると、1949年12月に「神奈川競輪株式会社（仮称）と神奈川県との間に競輪場の建設、管理、運営、賃貸借に関して仮契約締結」、1950年5月に花月園競輪場開場、1950年7月に神奈川競輪株式会社創立、1958年8月に花月園観光株式会社に社名改称、1962年9月に東京証券取引所市場第2部上場となっている。花月園観光株式会社公式ページ<http://www.kagetsuenkanko.co.jp/gaiyo.htm>（最終閲覧日：2015年12月10日）。なお、1950（昭和25）年に、鶴見区に本社を置く松尾工務店が、花月園競輪場建設を請け負い、「各種の補償交渉にも精力的に当たったことから」、花月園観光株式会社（旧名：神奈川競輪株式会社）の設立後に経営に参画している。1986（昭和61）年には、「花月園観光株式会社より花月園競輪場メインスタンド新築工事及び管理棟新築工事も受注」している。株式会社松尾工務店公式ページ「会社概要：5分でわかる松尾の歴史」http://www.matsuo-komuten.co.jp/coporate_profile/matsuo_history.html（最終閲覧日：2015年12月10日）。
- 2) 開発の経緯と概要については以下を参照。横浜市都市整備局「花月園競輪場跡地等の利活用」<http://www.city.yokohama.lg.jp/toshi/kikaku/kagetsuen/>（最終閲覧日：2015年11月28日）。横浜市環境創造局「（仮称）鶴見花月園公園」<http://www.city.yokohama.lg.jp/kankyo/park/make/seibi/kagetsuen/>（最終閲覧日：2015年11月28日）。UR都市機構「鶴見一丁目地区」<http://www.ur-net.go.jp/tsurumi/>（最終閲覧日：2015年11月28日）。
- 3) この著作の発行後も、齋藤美枝氏は「鶴見歴史の会」の会員として、花月園遊園に関する多くの歴史文化イベントやメディアの取材に協力している。主な記事には以下のものがある。①「谷崎潤一郎と鶴見の意外な関係 花月園舞踏場から生まれた『痴人の愛』」『タウンニュース鶴見区版』2012年9月27日号<http://www.townnews.co.jp/O116/2012/09/27/158943.html>（最終閲覧日：2015年12月29日）。②「花月園競輪場の前身「花月園」が東洋一の遊園地だったって本当！？」[はまれぽ.com]http://hamarepo.com/story.php?story_id=2508（最終閲覧日：2015年12月29日）。最近開催された花月園競輪場跡地に関するイベントでも「歴史解説コーナー」を担当している。③横浜市鶴見区公式ページ「11月23日（月・祝）「さよなら花月園競輪場イベント」を開催します！」<http://www.city.yokohama.lg.jp/>

tsurumi/topics/20151019/sayonarakagetsuen.html（最終閲覧日：2015年12月29日）。

- 4) 正確に言えば、歴史的文脈を説明する前半部において、京浜電気鉄道がレジャー開発と観覧鉄道からやがて沿線の郊外住宅地開発を行っていく過程を描くなかで、1914年に遊園地の開園に合わせて「花月園前停留場」が京浜電気鉄道によって設置されたことを表のなかで示しているのだが、競輪場については触れていない。
- 5) たとえば、伊丹十三監督『マルサの女』（1987）や北野武監督『菊次郎の夏』（1999）の撮影が行われている。「伊丹十三記念館 記念館便り 花月園競輪場訪問記1」
<http://itami-kinenkan.jp/tayori/2010/02/000201.html>（最終閲覧日：2015年12月29日）、「【競輪取材ノート】花月園競輪場あす閉場」ZAKZAK <http://www.zakzak.co.jp/race/bicycle/news/20100330/bcy1003301319000-n2.htm>（最終閲覧日：2015年12月29日）を参照。
- 6) 大宅壮一文庫 雑誌記事索引検索 Web版<https://www.oya-bunko.com/>において「花月園」で検索すると22件の記事が見つかる（最終閲覧日：2015年11月9日）が、その中で花月園競輪場を取り上げた主な雑誌記事としては以下の8件が挙げられる。
 - ①「探険 母と娘で味わう「悦楽」スポット お父さんにはないしょ 25回 花月園（神奈川県横浜市鶴見区）※競輪場」『女性セブン』1995年7月27日、
 - ②「あったかデート決定版！ ギャンブル 特別観覧席で燃えるレース観戦 ※「花月園競輪場」「立川競輪場」「松戸競輪場」「西武園競輪場」「大宮競輪場」『東京ウォーカー』1999年2月2日、
 - ③「異国情緒あふれる街 横浜・花月園周辺散策 ※生麦事件跡、横濱カレーミュージアム、中華街など」『けいりんマガジン』2001年12月、
 - ④「観る食す 東の花月園 日々進化する街…。みなとみらい線が開通し、より便利になった横浜地区。※中華街、ラーメン博物館など」『けいりんマガジン』2004年3月、
 - ⑤「昭和恋々ダウタウン 川崎・鶴見 賭けずに楽しむ3大ギャンブル場 大空仰いで風を感じ、ヤジを肴に飲れる場所 ※川崎競馬、川崎競輪、よこはま花月園競輪」『散歩の達人』2007年11月、
 - ⑥「場の磁力（20）横浜市鶴見区・花月園競輪場 料亭の主人が求めた遊園地の夢」『週刊東洋経済』（6242）、
 - ⑦「さようなら花月園 3月29日から31日に行われた「花月園・ザ・ファイナルvol.2」を最後に、花月園競輪場の60年の歴史に終止符が打たれた」『けいりんマガジン』2010年6月、
 - ⑧「怪覧板 東証上場でトップの高騰率！ 株価高騰で脚光を浴びる「花月園観光」に上場資格はあるか ※主力の競輪事業がなくなり場外車券売場の運営で食いつないでいる状況に」『実業界』2012年5月。
- 7) 分析結果は検索システムの制約に大きく左右されることには注意が必要である。4紙すべての記事が検索可能になるのは『産経』が検索可能となる1992年9月以降となる。実際の記事選択では、朝日新聞については、朝日新聞社のデータベース「聞蔵Ⅱ」から直接取得し、その他の新聞については、G-Searchから取得した。なお、G-Searchの全文検索が可能な期間は、朝日新聞社のデータベース「聞蔵Ⅱ」、読売新聞のデータベース「ヨミダス歴史館」、「毎日新聞記事データベース」、産経新聞

データベースと同一である。

- 8) 「花月園」を含むものの花月園競輪とは直接関係のない代表的な記事の内訳は次の通りである。神奈川県箱根町仙石原の「ホテル花月園」(「箱根ホテル花月園」)が含まれる記事は、朝日8件、読売14件、毎日105件、産経112件が得られる。北九州市門司区花月園については、「花月園」と「門司」を含む記事を調べると、朝日9件、読売21件、毎日18件、産経3件が存在した。キーワード「花月園」での全ヒット件数からこれらのキーワードに関連する記事を除外するだけで朝日98件、読売66件、毎日100件、産経77件となる。ここからさらに、花月園競輪等に関連しない記事を除外した。なお、「ロジ花月園」はいずれの新聞も0件である。「ホテル花月園」および「ロジ花月園」については花月園観光が経営を行っていた時期があるが、そもそも花月園観光株式会社が、1962(昭和37)年に箱根ホテル花月園、1970(昭和44)年に山中湖ロッヂ花月園を建設し運営していた。しかし、2006(平成18)年からは、花月園観光株式会社の観光施設部門である箱根ホテル花月園、山中湖ロッヂ花月園の経営を松尾工務店の関連会社の和興通商株式会社が行っている。株式会社松尾工務店公式ページ「会社概要：5分でわかる松尾の歴史」http://www.matsuo-komuten.co.jp/coporate_profile/matsuo_history.html (最終閲覧日：2015年12月10日)。ホテル花月園公式ページにも、「総合建設会社・株式会社松尾工務店を基幹とする企業グループ」である「松尾グループの中のソフト事業部門」がホテル花月園とロッヂ花月園を運営していることが述べられている。ホテル花月園公式ページ<http://hotelkagetsuen.net/recruit> (最終閲覧日：2015年12月10日)。花月園観光が関わっていた業務ではあるものの、宿泊業の経営は競輪事業と直接結びつくとは言えないため、これらの施設について報じた新聞記事は割愛した。
- 9) 1984年8月4日以降で初めて登場する記事は、1985年5月31日の「もう一つのプロ野球(35)宝塚運動協会(20世紀の軌跡：1394)『朝日』である。ここでは、「優美な少女歌劇と男臭いプロ野球の二本立てで宝塚へ客を呼ぼう」という、小林一三の構想」の一端が紹介されている。関東大震災によって解散した日本運動協会が宝塚運動協会として生まれ変わり、プロ野球チームが宝塚に引き継がれる際、「花月園などいくつかの企業からも同様の申し出があった」と述べられている。ちなみに、1980年代は、株価の報道のなかで花月園競輪についてもわずかに言及しているものが80年代初頭に3件確認できただけである。1980年代後半までの関連する記事は、1988年6月9日「平塚・小田原競輪も電話投票受け付けへ」『朝日』で、電話で車券購入が可能な南関東競輪電話投票に、川崎、花月園、静岡に加えて、平塚、小田原も加わることとシステムの内容が報じられている程度である。
- 10) 1990年6月14日「横浜市は実は株長者なんです 5銘柄、時価150億円(経済ガイド)』『朝日』では、横浜市が保有する株五銘柄のうちの一つ花月園観光株について約87万8000株を保有していることが報じられている。加藤智・市資金課長の「売却する訳にはいきません。先人たちが残してくれた財産ですから」との談話も掲載さ

- れているように、競輪事業を柱とする花月園観光株は優良株として捉えられていた。
- 11) 他のイベントとしては、1992年3月23日「This・Week・かながわ（3月23日－3月29日）」『朝日』のなかの、「首都圏のアマ、バンクで激突」では、23回目の1都3県対抗自転車競技大会が花月園競輪場で開催され、東京、千葉、埼玉、神奈川の首都圏のアマチュア代表が参加することが報じられている。
 - 12) 1996年11月6日「初の民間場外車券場 新潟・栃尾に27日オープン」『読売』は、11月27日に全国で初めて民間の競輪場外車券場である「サテライト中越」が開設され、東京都市収益事業組合が管理運営を行い、「東京都の立川競輪や横浜市の花月園競輪など各地の競輪場の車券を一年中販売する」ことを報じている。
 - 13) イベントに関するものとして、2001年11月13日「息、ぴたり 横浜で日本障害者自転車競技大会／神奈川」『朝日』では、11日に、翌年8月にドイツで開かれる世界選手権の選考大会である「日本障害者自転車競技大会トラックレース」が、花月園競輪場で開催されたとの報道があった。
 - 14) この間にも、2009年4月14日「場外馬券・車券売り場：建設計画相次ぐ 地元住民、青少年に影響懸念も／長野」『毎日』では、長野県須坂市高梨町において花月園観光が50%を出資する場外馬券売り場建設計画の説明と、それに対する行政や住民の見解が掲載されている。リード文では、「県内で場外馬券・車券売り場建設計画が相次いで持ち上がっている。これまで県内で設置されたことはないが、いずれの業者も空き施設の有効活用や地元雇用など地域の活性化につながるとし、説明会を開催するなどして理解を得たい考えた。ただ、地元住民から青少年育成への影響などを懸念する声も上がっている」と解説されている。
 - 15) 他のイベントに関するものとして、2008年3月23日「自転車：北京パラリンピック 石井さん、藤田さん内定 花月園で合宿開始／神奈川」『毎日』では、北京パラリンピックの自転車で、県内から2名が日本代表に内定し、22日に花月園競輪場で合宿を開始したことが報じられた。

文 献

- 石川義憲 2010. 日本の公営競技と地方自治体. 自治体国際化協会：比較地方自治研究センター.
- 小川 功 2011. 明治期近郊リバーサイドリゾート経営のリスクと観光資本家——墨東・向島の鉾泉宿・有馬温泉と遊園・花月華壇の興亡を中心に. 跡見学園女子大学マネジメント学部紀要 (12) : 1-21.
- 花月園観光株式会社編 1975.『限りなき明日を創造する』花月園観光株式会社.
- 花月園観光株式会社編 1980.『花月園観光30年史』花月園観光株式会社.
- 神田孝治 2009.『レジャーの空間——諸相とアプローチ』ナカニシヤ出版.
- 京浜急行電鉄株式会社編 1998.『京浜急行100年の歩み——1898-1998』京浜急行電鉄.
- 京浜急行電鉄株式会社編 1999.『京浜急行百年史』京浜急行電鉄.

- 京浜急行電鉄株式会社編 2008.『京急グループ110年史——最近の10年（1998年～2008年）』京浜急行電鉄.
- 経済産業省製造産業局車両室 2014. 競輪・オートレースを巡る最近の状況について.
http://www.meti.go.jp/committee/sankoushin/seizou/sharyoukyougi/pdf/001_01_01.pdf
 (最終閲覧日: 2016年1月4日)
- 経済産業省製造産業局車両室 2015. 競輪・オートレースを巡る最近の状況について.
http://www.meti.go.jp/committee/sankoushin/seizou/sharyoukyougi/pdf/002_02_01.pdf
 (最終閲覧日: 2016年1月4日)
- 齋藤美枝 2007.『鶴見花月園秘話——東洋一の遊園地を創った平岡廣高』鶴見区文化協会.
- J K A編 2009.『競輪60年史』J K A.
- 武石みどり 2006. ハタノ・オーケストラの実態と功績. お茶の水音楽論集 特別号: 363-373.
- 立岡裕士 2000. 競輪の時空間——遊興空間の組織. 鳴門教育大学研究紀要 (15): 37-43.
- 永井良和 1991.『社交ダンスと日本人』晶文社.
- 野原 卓 2010. 臨海工業都市空間におけるレクリエーションについて——横浜市京浜臨海部におけるレジャー空間・福利厚生空間の展開を中心に. 都市計画論文集 45 (3): 181-186.
- 橋爪紳也 2000.『日本の遊園地』講談社現代新書.
- 古川岳志 1997. 競輪の変容過程——競輪から見たギャンブルとスポーツの関係. スポーツ社会学研究 (6): 84-96.
- 安野 彰・篠野志郎 1998.「遊園地取締規則」にみる明治・大正期の東京近郊の遊園地の概念——都市娯楽施設の史的研究. 日本建築学会計画系論文集 (506): 161-167.
- 安野 彰・篠野志郎 1999. 明治・大正・昭和初期における東京近郊の遊園地の実態——都市娯楽施設の史的研究. 日本建築学会計画系論文集 (518): 291-298.
- 寄藤晶子 2005. 愛知県常滑市における「ギャンブル空間」の形成. 人文地理 57 (2): 131-152.
- 寄藤晶子 2006. 常滑競艇場女性従業員の労働運動——「ギャンブル空間」へのジェンダー・アプローチに向けて. 2006年度人文地理学会大会研究発表要旨: 18.
- 寄藤晶子 2009. 公営ギャンブル場を中心に生成する社会空間. 神田孝治編『レジャーの空間——諸相とアプローチ』154-163. ナカニシヤ出版.